

コールリッジ, ワーズワース,
エマソンの自然感覚

Nature Feeling of Coleridge, Wordsworth & Emerson

平 岩 紀 夫

Toshio Hiraiwa

周知のとおり、十八世紀の詩は古典主義と呼ばれる厳格な形式主義に制約され、詩人は散文精神を厳正な形式を守りながら歌わされた。十八世紀の古典主義の特徴は、まず第一に、知性と理性を中核とすることであり、人間の感情、情緒、空想、妄想などを切り捨てることであった。第二に、十八世紀の詩の主題は、都市生活を歌うことであり、田舎の自然や田舎者を主題として詩を歌うことは認められなかった。第三に、格調の高い高級な詩の専門の言葉を使用して、厳格な品格の高い形式を守らねばならなかった。従って、平俗で通俗的な英語を使って、形式を無視した自由な歌い方をしたり、バラッド形式のような通俗大衆的な形式で歌ったりすることは、認められなかった。要するに、十八世紀の詩の主流は、散文精神と形式主義であった。

コールリッジもワーズワースもともに、以上の十八世紀の詩の伝統を、内容的にも形式的にも、根本的に新しいユニークな伝統に革命した。ここにかれらのロマン主義の本質があり、パオニア詩人としての地位が与えられた理由がある。

ここでは、コールリッジとワーズワースの自然を歌った詩を資料にして、とくに、両詩人の自然感覚を鑑賞することを目的とする。次に、十九世紀の初期から末まで生きて、アメリカの文化の創造に偉大な貢献をしたエマソンの自然の詩を中心に、彼の自然感覚、自然観を考察して、その特徴を知ることを目的とする。

コールリッジの自然感覚の特徴を知るのに興味ある資料を提供してくれるのは、言うまでもなく、彼の代表作品、*The Rime of the Ancient Mariner* が重要であろうが、*The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, edited by Kathleen Coburn, vol. 1, 1794-1804, Text, Bollingen Series L, Princeton University Press, 1957, Second Uncorrected Printing, 1980 と、*The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, edited by Kathleen Coburn, vol. 2, 1804-1808 Text, Bolingen Series L, Princeton University Press, 1961, Second Uncorrected Printing, 1980 の二冊の文献である。

上の vol. 1 の文献から、コールリッジの自然感覚を示す箇所を引用する。

^v
f 2 14 G. 6

The lowest part of the flame [of a]
Candle is always blue-w [hen]
the flame is sufficiently el [ongated]
so as to be just ready to [smoke]
the Tip is always red. —

上の引用の大意を訳すならば、ろうそくの炎の一番下の部分は常に青い……その炎が十分に長く延長され、すぐにも煙を上げそうになるときは、先端は常に赤い。

上の一節は、コールリッジが火の色、とくに、青い色と赤い色に鋭敏であり審美的であることを示す。次の例を引用する。

55 G. 48

Broad-breasted Rock.
hanging cliff that glasses
His rugged forehead in the calmy sea.

上の引用の大意を訳すならば、胸幅の広い岩。平穏な海に鋸の歯のようなひたいを映す断崖絶壁。

上の一節は、海にたいするコールリッジの男性的な荒荒しい愛好心と趣味を示す。海や断崖絶壁へのコールリッジの愛着は、後により積極的に、より十分に、ワーズワースのそれと対比的に実証される。引用を続ける。

^v
f 20 157 G. 152

The Sun (for now his Orb Gan slowly sink) ~~behind the Westen Hill.~~ /Shot
half his rays aslant the heath, whose flowers/Purpled the mountain's broad &
level top, /Rich was his bed of Clouds : & wide beneath/Expecting Ocean smiled
with dimpled face.

上の引用の大意を訳すならば、太陽は（今やその球体がゆっくりと沈みはじめた）荒地を斜めに横切って、その光線を半分だけ射出した その光の花が 山の幅広く水平の頂を深紅色に染めた。彼（その山）の雲の寝床は豪華であった。そして、下の方は広広として 期待している大海が 顔に皺しわをつくりながらにっこり笑った。

上の一節は、荒地を斜めに横切ってゆっくり沈みはじめた太陽が放射する光に関するコール

リッジの精緻で敏感な感覚を示し、また、その光が山の幅広くなだらかな山の頂を染める深紅色、すなわち強烈な赤い色に敏感に反応するコールリッジの自然感覚を示す。さらに引用を続ける。

258 G. 255

Vide Description of a Glory, by John Haygarth, Manchester Trans. Vol. 3. p. 463. On the the thirteenth of February, 1780, as I was returning to Chester, and ascending, at Rhealt, the mountain which forms the eastern boundary of the Vale of Clwyd, — in the road above me, I was struck with the peculiar appearance of a very white shining cloud, that lay remarkably close to the ground. The Sun was nearly setting but shone extremely bright. I walked up to the cloud, and my shadow was projected into it; the head of my shadow was surrounded at some distance by a circle of various colours whose centre appeared to the eye be near the situation of the eye, and whose circumference extended to the Shoulders. The circle was complete except where the shadow of my body intercepted it — it exhibited the most vivid colors red being outermost — an the colors appeared in the same order & proportion that the rainbow presents to our view — The beautiful colors of the hoarfrost on snow in sun shine — red, green, & blue—in various angles.

上の引用の必要な部分の大意を訳すならば、1780、2月13日、わたくしがチェスターへ帰る途中、レアルト（Rhealt）で山を登っていたときのことであった。その山は、クルイッド（Clwyd）の溪谷の東の境界線をつくっているが、……上方の道路で、わたくしは、真っ白に輝いている雲の特異な姿を見て衝撃を受けた。その雲はいちじるしく地上に接近していた。太陽はもうすこしで沈みかけていたけれども、きわめて明かるく輝いた。わたくしは、その雲の方へ登って行った。すると、わたくしの影がその雲のなかに投影された。わたくしの影の頭は、若干離れた処で、色とりどりの色彩の円で周囲をとりかこまれていた。そしてそれらの色彩の中心は、目の位置に近いように思われた。そして、それらの色彩の周縁は、わたくしの両肩のところまで伸びていた。その色彩の円は、わたくしの体の影がそれを遮断している箇所をのぞいて、完全な円であった……それは最も鮮明な色彩を見せていたが、赤い色が一番はなやかに目立っていた……その色彩のすべてが、虹が人間の視覚に提供すると同様な順番と均衡をもってあらわれていた……太陽の輝きのなかの雪の上の白い霜の美しい色彩のかずかず……赤、緑、そして青……それらの色がさまざまな角度から見えた。

上の一節は、まず第一に、真っ白に輝く雲の特異な印象にたいするコールリッジの鋭敏な反応を示す。第二に、この一節は、きわめて明かるく輝いている沈みかけた夕日の色彩と円い形にたいする驚嘆すべき精密で敏感な反応を示し、とくに、コールリッジの、はなやかに目立つ

赤い色にたいする愛好感覚を示す。第三にこの一節は、虹の色彩が人間の視覚に与える順番と均衡に関するコールリッジの審美感と、とくに赤、緑、青の色彩に関する彼の審美感覚を示す。さらに引用する。

335 3. 1

Tuesday Night [Sept.] 18th, 1798

Over what place does the Moon hang to your eye, my dearest Sara? To me it hangs over the left bank of the Elbe and a long trembling road of moonlight comes transversely from the left bank, reaches the stern of our Vessel, & there it ends. — We have dropped anchor in the middle of this grand Stream, 37 miles from Cuxhaven. We arrived at Cuxhaven this morning at eleven o'clock, after an unusually fine passage of only 48 hours — / Chester was ill the Whole time — Wordsworth shockingly ill. — Miss Wordsworth worst of all — vomiting & groaning & crying the whole time! — And I the whole time as well as I ever was — neither sick or giddy. The sea rolled rather high, but I found the motion pleasant to me. At Cuxhaven the Captain agreed that he would take us up to Humburgh for a guinea a piece — to which we assented — & shall be there, if no fogs intervene, tomorrow morning. — The Ocean is a noble thing by night — / the foam that dashes against the vessel, beautiful. White clouds of Foam roaring & rushing ~~over the~~ Sea, by the side of the vessel with multitudes of stars of flame that danced and sparkled & went out amidst it — light skirmishes — / First sight of land a [ba] rren Island — the main land — low, flat, dreary — with light-houses & land-marks, scarce able to hold its head above water. / — From this the mouth of the Elbe — could not see but one shore / Cuxhaven — / can see both in clear weather — banks neat, & flat, & quite artificial — Steeple & windmill, & cottage, & wind mill & house & steeple & wind mill & wind mill, & neat house, & steeple. beautiful Island 40 miles from Cuxhaven.

上の引用の大意を訳すならば、1798年、9月18日、火曜日の夜。わが最愛のサラよ、あなたの目の上のどのあたりに月がかかっているのだろうか。わたくしにとっては、エルベ河の左手の岸辺の上空に月がかかっている。そして、月明かりの長い震えている道路が、左手の岸辺から斜めに横断して、われわれの船の船尾に到達して、そこで終わっている。……われわれは、カックスヘイヴンから36マイルのところにあるこの大河の流れの真ん中に錨を下ろしたばかりである。われわれは、わずかに48時間の珍しく快適な航海の後に、今朝11時にカックスヘイヴンに到着した……チェスターは始終気分がすぐれなかった……ワーズワースの気分の悪さは衝撃的であった！……ワーズワース嬢は、全員のなかで最もひどい状態であった……吐きながら呻き声をあげ、始終泣き叫んでいた！……そして、その間ずっとわたくしは、いまだかつて

ないほど気分が良かった……気持ちが悪くなることもなく、目眩^{めまい}がすることもなかった。海のうねり波は相当高かったけれども、わたくしはその波の運動を気持ちが良いと感じた。カックスヘイヴンで、船長は、一人につき一ギニーの船賃で、われわれをハンブルクへ上陸させることに同意し、われわれはそれを承諾した……それで、もし霧が邪魔しなければ、明日の朝、そこに到着する筈。……大洋は、夜は崇高な物である……船にぶっかる波の泡は、美しい。泡の白い雲の群れが、船の横腹のそばで咆哮しながら突進してゆき、無数の炎の星が踊りながら閃光を放ちながら、大洋のなかへ去って行った……光が小競り合いをする……陸地は、最初見たときは、不毛の島であった……本土は……低く、平べったく、もの淋しくて……灯台と陸標が見え、本土は、その頭を海の上にほとんど出しかねていた。……ここからエルベ河の河口になるが……ひとつの海岸しか見えなかった……カックスヘイヴンだ……天気が良いときには、両方が見える……さっぱりとして、平面で、全く人工的な岸辺……寺院の尖塔と風車、小屋、風車、人家、尖塔、風車また風車、こざっぱりした人家、尖塔。カックスヘイヴンから40マイルのところにある美しい島だ。

上の一節において、とくに注目すべき箇所は、まず第一に、コールリッジは、航海中に、相当波が高く船が揺れているときでさえも、船酔いを全くしないどころか、かえって快感を感じ、夜の海の崇高さ、船にぶっかる波の泡の美しさ、船の横腹のそばで咆哮しながら突進する泡の白い雲の群れの美しさ、踊りながら閃光を放ちながら大洋のさなかへと去ってゆく無数の炎の星の美しさ、小競り合いをする光の美しさ、これらの海の美しさを心ゆくまで鑑賞することができるほどに、海に強い詩人であることである。言いかえるならば、コールリッジは、とくに海のあらゆる自然の美しさに関して技俗非凡で異常なまでの審美感覚の持ち主である。さらに言うならば、コールリッジほど、海に関して、精緻で鋭敏な審美感覚、とくに、色彩と光に関する審美感覚を持ちながら、しかもなお、彼ほど航海に強い詩人は、ほかにはほとんどいない。

従って、コールリッジの代表的作品と言われる *The Rime of The Ancient mariner* が、海を主題とする詩である決定的な必然性が、この事実によって暗示される。

第二に、注目すべきことは、コールリッジとは対局的に、ワーズワースは、海に出れば衝撃的に気分が悪くなったことである。つまり、ワーズワースは、詩人としても、海に出れば、コールリッジとは対局的に、全く無力であったと言える。この視点からワーズワースの詩の代表的な傑作を見渡すならば、彼の作品には、海と航海を主要テーマとした代表的な詩はひとつも無い。この点に、コールリッジとワーズワースは、二人とも巨人的パイオニア詩人であるが、両者の自然感覚の対局的な相違があると言える。バイロンも海と航海には非常に強い詩人であり、周知のように、*Child Harold's Pilgrimage*, *The Cosair*, *The Giaour* のような海と航海を主題とする長詩を残した。しかしながら、バイロンの海と航海に関する自然感覚は、コールリッジのそれとは全く異質のものであり、すくなくとも、コールリッジの光と色彩

に関する海其自然感覚の精緻な審美性は、バイロンの自然感覚には全く無い。スインバーンの海に関する自然感覚も、コールリッジのそれとは全く異質のものである。しかしながら、バイロンもスインバーンも、二人とも、海を主要なテーマとする詩人であり、二人ともそれぞれ魅力あるそして重要な注目すべき海其自然感覚の持ち主であり、そのことについては、出版を目的として執筆中の原稿において詳細に説明してある。引用を続ける。

40 miles from Cuxhaven — shore increases in beauty — green, & the trees close to the water, with neat houses & sharp steeples, some white, some black, and some red, peering over them. — On the right bank the greatest profusion of Churches — / — / — The trees & Houses are low — sometimes the low trees overtopping the lower houses, sometimes the houses overtopping the low trees — / & both right & left bank green to the brink & level with the water, like a park Canal — 16 miles from Hamburg — i. e. 46 from Cuxhaven — on the left bank, belonging (all the way to Denmark) the Village of Veder with a black steeple — & close by it without a church the pastorally wild Village of Schulau / & then the Left bank rises 30 feet at least above the water, a sandy facing with thin patches of green like the banks about Shurton Bars — & looking upward, along the sand banks you see ~~black~~ highlands brown, and barren, & with patches of naked sand — / — reach these highlands, & came to Blankanese, a very wild village scattered amidst scattered trees in three divisions over three hills — yet in divisions yet seemingly continuous — each hill towards the river has a facing of bare sand, & bale in boats with bare poles standing in files along the banks in fantastic harmony in between each facing, a dell of green & woody — / — and here first we saw the spires of Hamburg. —

上の引用の大意を訳すならば、カックスヘイヴンから40マイル……海岸は美しさを増す……
 緑　そして　海辺の樹木　こざっぱりした人家と鋭い尖塔　白いのもあり黒いのもあり　赤いのもあり　人家をじっと見おろしている。……右手の岸辺の上には　最大に豊富な教会— / — / — 樹木と人家は低い……ときには　低い樹木が　より低い人家よりも高く　ときには　人家がより低い樹木よりも高い— / — そして　右手の岸も左手の岸も　水辺に到るまで緑地であり海の水と同じ高さである　カナル遊園地に似ている……ハンブルグから16マイル……すなわちカックスヘイヴンから46マイル……左手の岸は　（ずうーっとデンマークに所属するが）その岸の上には　ヴェッダの村があり　真っ黒い尖塔がひとつある……そして　そのすぐそばに教会の外側に　牧歌的で原始的なシュラウの村があり……それから　左手の岸は　すくなくとも海拔30フィートあって　緑色の薄いつぎはぎのある砂地の縁取りであり　シャートン、バーズあたりの岸に似ている……そして　上を見上げるならば　砂の岸にそって褐色の高知が見え

る。そこは不毛の地で、裸の砂のつぎはぎがある— / —これらの高地に到着する。そして、ブランカニーズへ到達した。そこは、三つの小山の上の三つの区分に散在する樹木のなかにばらまかれた。まことに原始的な村であって……分割されながらも連続しているように思われる……各々の小山が河の方に向って、裸の砂の縁取りをつけており、岸ぞいに列をなして立っている裸のマストを持つボートも縁取りとなり、その各々の縁取りの間には奇妙な調和がある。緑色で木の茂った小さな谷間— / —そしてここではじめて、ハンブルグの尖塔が見えた。

上の一節に関してとくに注目すべきことは、この一節に、コールリッジの愛好し本能的に彼の視覚が反応する色彩が示されていることである。言いかえるならば、コールリッジの自然に反応する色彩感覚の特徴が示されている。まず第一に、コールリッジの色彩感覚が反応するのは、緑色である。

第二に、それは、白い色と黒い色である。

第三に、それは、褐色である。

第四に、これらの色彩のなかでも、コールリッジは、とくに緑の色にひんぱんに反応を示している。

これらのコールリッジの色彩感覚は、彼の最大傑作 *The Rime of the Ancient mariner* の重要な目立った色彩心象となって、この詩を特徴づけている。

次にエマソンの自然感覚を、コールリッジやワーズワースの自然感覚と比較してみる。Ralph Waldo Emerson (1803—82) に関して使用する文献は、*The Autograph Centenary Edition of the Writings of Ralph Waldo Emerson* と呼ばれる600部限定版で、筆者が所有するのは第198番の版であり、書名は、*The Complete Works of Ralph Waldo Emerson with a Biographical Introduction and Notes by Edward Waldo Emerson and a General Index* であり、1903から1904にかけて出版された全12巻の全集であり、マサチューセット、Cambridge の Riverside Press から出版された。1876年に R. W. Emerson が版權を取り、1883年と1903年に E. W. Emerson が版權を取った。この全集は、濃緑色の半モロッコ革装、金装飾付きの美本全集である。この全集の第一巻において *The Young American* と題して、エマソンは次のように言う。彼の発言は、コールリッジの自然感覚とは対局的なエマソンの最も基本的な自然観を暗示する。

and it now appears that we must estimate the native values of this broad region to redress the balance of our own judgments, and appreciate the advantages opened to the human race in this country which is our fortunate home. The land is the appointed remedy for whatever is false and fantastic in our culture. The continent we inhabit is to be physic and food for our mind, as well as our body. The land, with its tranquillizing, sanative influences, is to repair the errors of a scholastic and traditional education, and bring us into

just relations with men and things. (P.P. 365-366)

上の引用の大意を訳すならば、そして、今や、われわれ自身の判断の釣合を矯正するために、この広大な地域の本来、自然の価値を評価しなければならないように思われる。そして、われわれの幸運な故郷であるこの国における人種にたいして開放された利得を高く評価しなければならないように思われる。その陸地は、われわれの文化において、なんであろうと、虚偽で荒唐無稽であることにたいする指定された治療法である。われわれが定住する大陸は、われわれの肉体の薬であり食物であるのみならず、われわれの精神の薬であり食物でもある。その陸地は、その精神神経安定剂的な、治癒力のある影響力をもって、学者的で伝統的な教育の過ちを矯正すべきであり、われわれを、人間と事物との正しい関連の中へ導入するべきである。

上の一節の要点をまとめるならば、エマソンによれば、まず第一に、アメリカ大陸に定住する人間は、かれら自身の判断の釣合を矯正するために、広大なアメリカ大陸の本来の価値を評価しなければならない。これは、エマソンの自然の価値観の対象は、海洋ではなくて、アメリカ大陸の陸地であること意味しており、従って、彼の詩人としての自然感覚、自然観も、大陸的価値観から生まれていることになる。

第二に、エマソンによれば、アメリカ大陸は虚偽と荒唐無稽の治療法として指定される。従って、彼の自然感覚、自然観は、真実に関しても、大陸と交流する。

第三に、エマソンによれば、アメリカ大陸は、ヨーロッパやイギリスの伝統的な学者的教育を治療するための精神神経安定剂的な働きをするべきである。従って、エマソンは、教育に関しても、大陸と交流して、アカデミックな学問の非実践性を排除する。従って、エマソンの自然感覚、自然観は、このような実利的教育観に基づく。それは大陸的自然感覚であり自然観である。

以上の三つの点においても、エマソンの自然感覚、自然観は、コールリッジの海洋的自然感覚、自然観とは対照的に、大陸的であり、ワーズワースのそれらよりも実利主義的である。

次に、エマソンは *Nature* と題して次のように言う。

The stars awaken a certain reverence, because though always present, they are inaccessible, but all natural objects make a kindred impression, when the mind is open to their influence. Nature never wears a mean appearance. Neither does the wisest man extort her secret, and lose his curiosity by finding out all her perfection. Nature never becomes a toy to a wise spirit. The flowers, the animals, the mountains, reflected the wisdom of his best hour, as much as they had delighted the simplicity of his childhood. (P.P. 7-8, vol. 1)

上の引用の大意を訳すならば、星はある畏敬の感を目覚ましめる。なぜならば、星は、常に

存在してはいるけれども、接近することができないからである。しかしながら、人間の精神が自然の事物にたいして開かれているときには、あらゆる自然の事物は同族的な印象を作る。自然は、下劣な様相を帯びることは絶対にない。また、極めて賢明な人間は、自然の秘密を強奪することもしないし、また、自然の完全さをすべて見付けだすことによって、おのれの好奇心を失うこともない。自然は、賢明な靈魂の人間にとってつまらない物となることは絶対にない。花、動物、山岳は、それらが彼の子供の頃の純真さをもって悦ばしたと同じ程度に、彼の最良の時刻の叡智を反映した。

上の一節の要点をまとめるならば、まず第一に、エマソンは、彼の畏敬の靈感を、接近不可能の星と交流させる。

第二に、エマソンは、彼の精神が自然の事物にたいして開かれているときには、彼の精神を、あらゆる自然の事物と融合させることができる。

第三に、エマソンは、自然に関して、彼の感性を下劣な様相と交流させることは決してしない。

第四に、エマソンによれば、極めて賢明な人間は、永遠に自然を通して神秘と交流することができる。

第五に、エマソンによれば、賢明な靈魂の人間は、自然に関して、彼の感覚をつまらない物と交流させることは決してない。

第六に、エマソンによれば、賢明な靈魂の人間は、花、動物、山岳を通して、彼の子供の頃の純真さを悦びと交流させ、それと同じ程度に、花、動物、山岳を通して、彼の最良の時刻を叡智と交流させる。

以上にまとめたように、エマソンが、彼の靈感、精神、感性を、畏敬や神秘や悦びや叡智と交流させる媒介となるのは、陸地の花や動物や山岳及び陸地から見る星であり、エマソンがとくに海洋自然を、そのような媒介物として特に強調する箇所は、彼の自然論にはない。

さらにエマソンは次のように言う。

In good health, the air is a cordial of incredible virtue. Crossing a bare common, in snow puddles, at twilight, under a clouded sky, without having in my thoughts any occurrence of special good fortune, I have enjoyed a perfect exhilaration. I am glad to the brink of fear. In the woods, too, a man casts off his years, as the snake his slough, and at what period soever of life is always a child. In the woods is perpetual youth. Within these plantations of God, a decorum and sanctity reign, a perennial festival is dressed, and the guest sees not how he should tire of them in a thousand years. In the woods, we return to reason and faith. There I feel that nothing can befall me in life, — no disgrace, no calamity (leaving me my eyes), which nature cannot repair.

Standing on the bare ground, — my head bathed by the blithe air and uplifted into infinite space, — all mean egotism vanishes. (P.P. 9-10, vol. 1)

上の引用の大意を訳すならば、健康がすぐれているときには、大気は信じられないほどの美德の強壯剤である。曇り空の下を、たそがれどきに、雪の水溜まりのなかを、裸の荒地を横断したとき、わたくしの心のなかには、とくにこれといった幸運が起ると言う思いはなにもないのに、完全な陽気さを味わったことがある。わたくしは恐怖の瀬戸際に到っても悦びを感じる。森のなかにおいてもまた、人間は、蛇がぬけがらを投げ捨てるように、年齢を投げ捨てる。そして、たとえ人生のいかなる時期においても、常に子供である。森のなかには永遠の青春がある。神のこれらの植林地の範囲内においては、ひとつの秩序整然と神聖さが支配する。一年中絶えることのない饗宴が調理され、来客は千年たってもその饗宴に飽きることを知らない。森のなかにあっては、人間は理性と信仰に帰る。そこでは、わたくしは、人生において、不吉なことは起らないと感じる。……自然が回復させることができないようないかなる不名誉も災難も、わたくしの目には見えない。わが頭に陽気な空気を浴びながら、無限空間のなかへ高揚されながら、裸の地面に立つときには、あらゆる下劣な利己主義は消失する。

上の一節においてとくに注目すべきことは、まず第一に、エマソンは、曇り空の下、たそがれどき、雪どけの水溜まり、裸の荒地の横断、いかなる幸運も起る希望のないとき、これらにもかかわらず、自然を通して彼の感性を完全な悦びと交流させることができるタフな精神の持ち主である。

第二に、エマソンは、森を通して、彼の感性を神と交流させ、神聖な秩序整然と交流させる。

第三に、エマソンは、森を媒介物として彼の精神を理性と信仰と融合させる。

このように、エマソンが、彼の靈感を神と交流させるための媒介物は、森であって海ではない。

全集の第9巻に集められているエマソンの詩は約169ぐらいあるが、それらの詩の中で、海に関して歌った作品は、*Seashore* と題する詩だけであり、これも、海辺を主題としている詩であって、大洋、海洋、航海そのものを主題とする詩ではない。エマソンは、このように、海洋や航海を主題とする詩を作らなかった点では、ワーズワースと似ている。エマソンもワーズワースも、海洋の自然でなく、陸の自然を主要なテーマとして歌った点において、コールリッジとは違う。しかしながら、エマソンは、アメリカ人特有の実利主義、プラグマチズム、ヤンキーズムを彼の自然観のなかに内包する点で、ワーズワースとは違う。この両者の比較は稿を改める。そして、コールリッジは、彼の代表的傑作 *Rime of the Ancient Mariner* において、海と船海を通して、神と交流することを最後にとくに強調しておく。